

ノーモア・ヒバクシャ通信 第31号

発行 2016年10月31日

ホームページ <http://www.kiokuisan.jp/>
継承ブログ <http://keishoblog.com/>
フェイスブック <https://www.facebook.com/kiokuisan>
ツイッター <https://twitter.com/nomorehibakusha>

発行者
NPO 法人 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会
〒102-0085
東京都千代田区六番町 15 プラザエフ 6F
Tel/Fax 03-5216-7757 (直通)
Email hironaga8689@gmail.com
郵便振替口座 00170-5-694752
(口座名義) ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産基金

★もくじ

I. 第2回理事会(10月)のご報告	P 1
II. 日本被団協結成60周年にあたって	P 2
III. 被爆者との交流会	
1. (東京) 8/27 (土) 被爆者の証言と「継承」を考える	P 3
2. 被爆者との交流会(関西)のご案内	P 5
IV. 部会、作業グループの取り組みから	
1. 資料庫部会	P 5
2. 継承交流部会	
(1) 被爆者運動から学び合う学習懇談会 シリーズ5「沖縄戦 被害・加害の実相と被害者のたたかい」	P 6
(2) 被爆70年調査“その人の人生の中に原爆体験がある”	P 8
3. 広報電子化部会	
(1) 「継承活動に取り組む人々をつなぐPJ」参加者募集のご案内(再掲)	P 9
V. 各地の取り組み、関連企画から	
(1) (東京) <ヒロシマ・2016 連続講座> 「被爆証言に向き合うに参加して」	P 10
(2) (神奈川) 神奈川県原爆死没者慰霊式・追悼のつどいに参加して	P 18
VI. 米国オハイオ州ウィルミントン大学の平和資料センターを訪ねて	P 22
VII. 出版物のご紹介	P 23

I. 第2回理事会(10月)のご報告

10月15日(土)午後1時半から4時半まで、東京四谷の主婦会館プラザエフで今年度の第2回理事会が開催されました。主な審議事項は、(1) デジタル・アーカイブ化の具体的な取り組みについて、(2) 社会的認知をめざす企画について、です。

(1) は、<継承する会の活動実態を映像で伝える><アーカイブ化した資料サンプルを実際に見せる>プロモーションビデオを観賞しました。その特徴は、アーカイブ化した資料について①保存→②公開→③参加型のものにし、オンライン上に掲載することで、誰でもアクセスでき、ワークショップなどに利用することもできるようにしていくことをめざします。今後、ホームページに掲載することも検討します。また、資料のデータベース化をすすめます。デジタル・アーカイブに本格的に取り組む体制が必要になっていきます。

(2) は、「継承する会が何をやっているか」が理解される対外的な企画を引き続き検討

していきます。なお、国立国会図書館関西館長よりインターネット資料収集保存事業への協力要請があり、これを了承しました。被爆者運動に学び合う学習懇談会および日本被団協結成60周年全国代表者会議プレゼンテーションの報告は、後述します。

II. 日本被団協結成60周年にあたって

10月13日、日本被団協結成60周年全国都道府県代表者会議において、《NPO法人 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会》について1時間ほど、活動紹介を行いました。当会は2011年12月設立以来、被爆者の皆さんの原爆とのたたかい（運動）を人類のあゆみ・歴史に刻むため、資料の収集・整理と継承・交流活動を2つの柱として取り組んできました。この間、日本被団協の運動関連資料や書籍・冊子類の収集・整理がある程度すすみ、各県の資料収集が課題となっています。また、その内容をインターネット上に順次掲載し、情報を可視化し発信していくために「デジタル・アーカイブ化」に取り組めます。一方、継承・交流活動としては、被爆70年調査の追加の聞き取りを若い世代と行うとともに、ヒロシマ・ナガサキは何だったのかをテーマに「被爆者運動に学び合う学習懇談会」をシリーズで開催してまいりました。

これらの取り組みの一端を下記のように紹介しました。

記

- | | | |
|--------------------|-------|---------------|
| 1. 継承する会について | 副代表理事 | 中澤 正夫氏（医師） |
| 2. デジタル・アーカイブについて | 理事 | 岡山 史興氏（経営者） |
| 3. 被爆70年調査について | 会員 | 八木 良広氏（研究者） |
| 4. 被爆者運動に学び合う学習懇談会 | 理事 | 吉田 一人氏（被爆者） |
| 5. 今後に向けて | 理事 | 伊藤 和久氏（会事務局長） |

記念式典



代表者会議で発言する中澤副代表理事



Ⅲ. 被爆者との交流会

1. (東京) 8/27(土) 被爆者との交流会～被爆者の証言と「継承」を考える～

NPO法人ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会が募集した参加型デジタル・アーカイブ制作のためのクラウドファンディングへご協力いただいた方への返礼の企画(一般の方も参加いただけるオープン企画)として8月27日に主婦会館プラザエフ5F会議室で被爆者の証言を聞き継承について考える会が開催され、大学生から社会人、被爆者と幅広い年齢層の男女20名が一堂に会しました。



■13:30 開会

当団体の取り組みや今回集まった趣旨や目的の共有。20名と少人数だったので軽く会場に集まった皆さんの自己紹介をしました。

■13:35 継承する会の紹介

継承する会の岡山理事から、継承する会の紹介とクラウドファンディングで資金を募集し制作を進めている「参加型デジタルアーカイブ」の紹介と今後の予定の発表がありました。

■14:00 被爆者の証言

被爆当時16歳だった岩佐幹三さんがその日のこと、そしてその後の人生を語ってくださいました。

71年経った今でも母の最期に投げかけた「生」と「死」の相対する言葉の矛盾に苦しめられ続けていて、現在はガンを抱えてそれでも「ヒバクシャを再び作らせない。傷が癒えることは一生ないが、これがヒバクシャとなった僕たちの戦いだ。」と力強く締めくくりました。



その後会場から出た質問で、「経験のない人が、被爆者の経験を伝承することをどのように思っていますか。また、継承に取り組むときに、これだけは忘れないでほしい、考えてほしいということはあるですか。」

という質問に対し、岩佐さんと被爆者である吉田さんは「自分を大切にすること。皆さんの問題なんです。被爆者という人類はいない。僕らは“被爆者”という運命を背負わされた人間なんだ。その時、その後、何でヒロシマ・ナガサキは起こったのかを知り、過去の問題ではなく未来の問題としてこだわってほしい。」と語りました。

■14:45 ディスカッション

事前にアンケート用紙で集計した質問を中心にディスカッションを行いました。

- ・継承者の裾野を広げるために、今必要なことは何か考えてみたいと思っています。
- ・今現在、日本でも世界でも「核兵器の悲惨さはわかるけれど、国を守るためには核の抑止力が必要なんだ。」という考えの方が、表に出てきているように感じます。ですから、どうすれば核兵器の廃絶を、もっと多くの人々の心に届くように訴えることができるのかを、ディスカッションで話し合ってみたいです。これについては、私はまだ自分の考えがまとまってはいませんが、核兵器の悲惨さを伝えることだけでは、まだ何か足りないのではないかと感じています。曖昧ですみません。
- ・被爆者の受け継ぎ手として、一人でも多くの方に、ノーモアヒバクシャを訴えていきたいです。特に若い世代へ伝えるときに考えなくてはならないことや、どんなアプローチがあるのでしょうか。
- ・継承に取り組んでいる方々には、どのような思いで取り組むようになったのか、ご自身で気をつけていること、大切な心構えなどがあれば、お伺いしたい。

20歳から87歳まで、自身の環境や時代を踏まえた様々な考えが飛び出し活発な意見交換がなされました。

■15:00 継承する会の取り組みの紹介

当会が行っている取り組みの紹介をしました。

- ①被爆者に実際に話を聞きに行き証言を遺していく「被爆70周年、被爆者として言い残したいこと」の調査について。
 - ②被爆者と継承者をつなげる「つなぐプロジェクト」について。
 - ③【連続企画】「ヒロシマ・ナガサキの継承を考える（仮題）」について
- 以上の紹介後、閉会となりました。



過去を知り、未来へつなげるということは容易ではありませんが、しかし大切なことです。

特に戦後71年の今、こうして被爆者の方々にお話を伺える機会も年をおうごとに少なくなっています。今回の取り組みも全力でやっていますが、まだまだ人手不足という事実も浮き彫りになりました。

少しでも多くの方がこの問題を知って、考えるきっかけになればそれが大きな力になるでしょう。少しでも興味をお持ちの方はお気軽にご連絡ください。

【連絡先】

NPO法人 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会

TEL/FAX 03-5216-7757

Email hironaga8689@gmail.com

2. 被爆者との交流会（関西）のご案内

継承する会の「参加型デジタル・アーカイブ」政策募金への返戻をかねて、8月の首都圏につづいて、関西での被爆者との交流会“被爆者とともに「ヒロシマ・ナガサキの継承」を考える”を開くことになりました。

11月26日(土)14:00～16:30、被爆者証言の世界化ネットワーク(NET-GTAS、代表：長谷邦彦さん)の後援をいただき、京都市右京区西院笠目町の「京都外国語大学」で開催します。

当日は、日本被団協の事務局次長・当会事務局の木戸季市氏(長崎被爆)から、ご自身の体験と「受け継ぎ手の人たちとこういうことに取り組みたい」という思いを語っていただき、それを受けて「ヒロシマ・ナガサキを継承する」というテーマで懇談・交流をします。また、継承する会がクラウドファンディングで資金を募集し制作を進めている「参加型デジタル・アーカイブ」など、継承する会の活動についてもご紹介する予定です。

今回の企画は募金にご協力いただいたみなさんだけではなく、京都・大阪方面の被爆者の会や継承活動にかかわる若者たちにも呼びかけ、一般の方にも参加いただけるオープン企画となっています。みなさまのお知り合いの方で興味、関心をお持ちの方がいらっしゃいましたら、誘い合わせて多数ご参加ください。

詳しくは同封の案内チラシをご覧ください。

IV. 部会、作業グループの取り組みから

1. 資料庫部会

継承する会では、これまでの数年間に、日本被団協の事務所ならびに継承する会の資料整理室(愛宕&南浦和)において、「総合(戦災誌、年史、目録)」「原爆体験記」「原爆文学・芸術」「被爆者調査・研究」「被爆者運動史」「核兵器・原水禁運動」「継承活動(学習・教育)」「空襲・沖縄戦・アウシュビッツ」の8つの柱に沿って、資料の収集・整理・保存にあたってきました。

そのうち、①「被爆者の会」(および協力団体)が編集・発行した、各地の体験記類、②「被爆者の会」が各地でとりくんできた被爆者運動(史)の刊行物のリストを都道府県別に作成、10月13日の日本被団協全国都道府県代表者会議に出席された各県代表にお渡しし、これに漏れている資料についての照会、残部の有無と寄贈の可否についての確認をお願いしました(欠席府県には、後日郵送にて依頼)。合わせて、各地の被爆者の会(都道府県、市町村)で(毎年)開かれた総会等の記録や、会で発行した会報・ニュースなどの保管状況についても照会しています。

なお、すでに愛友会(愛知県原水爆被災者の会)からは、1977年のNGO被爆問題国際シンポジウムに向けて県内で取り組んだ「一般調査」の原票など、県内の被爆者運動資料

が段ボールで8箱届けられており、なお追加が予定されています。

2. 継承交流部会

(1) 被爆者運動から学び合う学習懇談会

■ シリーズ5「沖縄戦 被害・加害の実相と被害者のたたかい」

“被害者が加害者に謝罪と償いを求めるのは当然のこと”



9月9日（金）、シリーズ5回目の学習懇談会は、結成60年事業の一環として12月に「沖縄交流ツアー」を行う日本被団協との共催企画として行われました。（於・プラザエフ5階会議室、参加者29人）

問題提起者の瑞慶山茂さん（弁護士）は、幼少時、南洋パラオからの避難船沈没から生き残りました。沖縄戦の被害者には民間人を排除した「戦傷病者戦没者遺族等援護法」が「戦闘協力」を条件として拡大適用されてきましたが、2010

年、この申請を却下された人、申請しなかった人たちで「沖縄・民間戦争被害者の会」を結成。一般民間被害者を救済する目的の「新援護法」の制定運動（立法的解決）とともに、沖縄戦、南洋戦の被害への国家責任を問う国家賠償請求訴訟（司法的解決）をめざしています。

《問題提起の要点》

死者が県民の1/4にあたる15万人にも及んだ沖縄戦では、唯一地上戦で空・海からの攻撃にさらされただけでなく、住民虐殺、「集団自決」（強制された集団死）、壕追い出しなど日本軍が住民に対する加害者であった点が、原爆や空襲の被害と異なる特徴だ。こうした日本軍の不法行為責任をポイントに倍償請求訴訟をたたかったが、那覇地裁の判決（2016.3.16）は戦時中には根拠とする法律がなかったという「国家無答責論」を楯にした血も涙もないものだった。

戦争損害とは最大の人権侵害であり、基本的人権は憲法以前の権利として明治憲法の下でも保障されていたはずだ。控訴審では、PTSDなど今もつづく被害の実態を前面に出し、国家無答責論は戦闘行為には及んでも、住民に対する日本軍の逸脱した行為は正当な軍事行動とは言えず、そこまで及ばないのではないかと追及していきたい。

国家補償制度の確立をめざしては、改めて戦争責任とは何か、原点を見直す必要がある。それは、誰かを裁いて処罰するということではなく、国家責任としての戦争損害賠償責任

を指している。基本的人権の侵害に対する被害回復、謝罪と償いを求める権利はこちらがもっており、交通事故と同じで、被害者が加害者に請求するのは当たり前のこと。それが戦争被害の場合はあべこべになっている。

《質疑討論の概要》

○ 戦傷病者戦没者遺族等援護法の適用拡大により、一般住民を「戦闘参加者」として救済することで、戦争に協力したと認められない者をオミットしてきたことが足かせになってきたのではないか？

○ 遺族会は当初から、軍人・軍属だけでなく全住民の被害者への補償要求を掲げてきたが、沖縄戦の被害を救済する法律は「援護法」しかなかった。この拡大適用は対政府への要求で、当時国会や司法は念頭になかった。そのため未補償の死者7万人、重傷者5万人が残されており、その後40年間運動がおこっていなかった。

○ 基地の原点は沖縄戦の被害にある。戦争被害は最大の人権侵害。その被害回復の（国家賠償を求める）たたかいと基地に反対するたたかいは結びつかねばならないが、実態としてそうした運動になっていない。

○ 損害賠償を求めるにしても、沖縄戦では、国も県も戦争損害については調査さえ行っていない。実態にあった調査要求もしていこうと思っている。また、被害の額は損害賠償額で出さないと意味がない。交通事故の場合の計算式を使って試算してみたが、どれだけ損害を受けたか、戦争とはいかに金のかかるものか（戦争の遂行にいくら金を使っているか）を示すことは大事だ。財政論は別な配慮、基本的な要求を下げる必要はないのではないか。

○ 沖縄戦がもたらした被害は、償われなくてもよい被害ではない。総力戦がもたらした被害をもっとも本質的にあらわした被害で、それに対する償いには従来の法では想定していなかった理念、思想、発想が必要だ。従来と違った弁護士がいるということに心をつよくした。

○ 被害回復のたたかいと被害継承も一体としてとりくむべき課題だ。被害がひどかったというだけでは、後世の人から、当時の人は被害回復、償いを求める運動をどうたたかったのか、歴史的な検証を受けると思う。被害の実相を伝えるだけでなく、それとどのように向き合ってきたのかを伝えたい。

【今後の予定】

■ シリーズ6 被爆者運動と裁判闘争

● 日 時：11月12日（土）13：30～16：30

● 場 所：プラザエフ5階会議室

● 問題提起：中川 重徳さん（弁護士、継承する会理事）

原爆投下は国際法違反とした原爆裁判の「下田判決」に始まり、原爆症の認定を争う桑原訴訟、石田訴訟、松谷訴訟、日本被団協による原爆症認定集団訴訟と現在もたたかわれているノーモア・ヒバクシャ訴訟など、被爆者たちが国を相手どってたたかってきた法廷

でのたたかいで明らかにされてきたのは何だったのか。さらに基本懇「意見」後全国各地で行われた「国民法廷」運動、国際司法裁判所による勧告的意見等、原爆を裁くための市民のさまざまなとりくみを、核兵器廃絶と原爆被害への国家補償をめざす被爆者運動との関連でかえりみます。

詳細は、同封チラシをご覧ください。

■ シリーズ7 原爆と戦後日本—あらためて原爆投下を問う（仮題）

日時未定。問題提起者：吉田 一人さん（長崎被爆、継承する会理事）

「原爆で戦争が終わった」というのは本当なのか？ 原爆前後の日本の中枢の対応を詳細に追いながら、日本の戦後史における原爆の意味を問い直します。

（2）被爆70年調査 “その人の人生の中に原爆体験がある”

アンケートと追加の聞きとり 被団協代表者会議で現状報告

日本被団協と継承する会が昨夏に行った被爆70年を生きて「被爆者として言い残したいこと」調査について、10月13日の日本被団協全国都道府県代表者会議で、“「被爆者として言い残したいこと」を聞くプロジェクト”の八木良広さん（愛媛大学教育学部特定研究員）がその回答の集計と追加の聞きとりの現状を報告しました。

アンケートの回収数は706名。うち男性が52%、女性が47.9%。年齢層では、15～19歳が3分の1を占めており、0～5歳、10～14歳がそれぞれ約2割となっています。

調査の実施が昨夏、安保法制（戦争法）が国会で強行されようとしている時期にあっていたこともあり、7つの設問のうち「被爆者として今とくに心にかかっていること」については、「核兵器が使用されるのではないか」（53.8%）以上に「日本が戦争する国になるのではないか」（64.6%）と答えた人が「自分の健康」（63.7%）と並んで多いこと。「今被爆者として日本政府に求めたいこと」については、「9条厳守」が77.3%と最も多かったこと（以下、「核兵器廃絶」72.2%、「実相普及」67.5%、「国家補償」52.7%とつづく）がとりわけ目立った特徴と言えます。

各項目とも、自由記述欄には被爆者ならではの「今言い残しておきたいことば」が数多く書き込まれており、その読み込み・分析も含めて「中間報告」をまとめて行きたいと考えています。

追加の聞きとり調査は、アンケート調査の結果を踏まえて、その内容をさらに拡充するための一つのプロジェクトです。目的は、被爆者への追加調査を市民や若者が行うことによって、「継承」を行うこと。この「継承」は、聞き取りの場を通じて、また追加調査の成果としての記録を作成・公開することを通じての、二つの方法で行われます。

アンケート調査に協力いただいた被爆者の中で追加調査への協力に「可」と回答してくださった方を対象として、6月から9月までの間に、首都圏で7人の被爆者（千葉：4人、東京：3人）にのべ21人が参加して聞きとりが行われています。

1 回に 3 時間ほどを使っていてねいにその方の人生を聞きとる調査に参加した人たちから寄せられた感想の一端をご紹介します。

- 被爆者の人生を聞く、という発想は、今までありませんでした。
- 今までとは違って、その人の人生の中に原爆体験があるのだということを意識しました。戦争による被害や大きな災害は、何人が犠牲になったという数字の話に意識が行きやすいのですが、一人一人の被爆状況はもちろん違いますし、またその人の考え方や環境によってそれがどんな影響を与え続けたのかも異なるという、当たり前のことをやっと理解することができました。一人一人の被爆体験を残していこうというこの聞き取り調査の重要性を感じます。また是非参加させてください。
- 71 年前の出来事にもかかわらず、まるで昨日のことのようなお話しに、まるで自分が体験しているかのような錯覚をおぼえました。
- 「目の前の、目をキラキラさせた子供達のおかげで生きようと思った」、と語ってくれた時、〇〇さんの表情が晴れていたような気がします。僕は、この表情こそ、多くのひとに知ってもらいたいと感じます。原爆の歴史を負の遺産として訴えるだけでなく、その遺産を踏まえ、どのようなライフストーリーが紡がれていったのか。「被爆者にとっての幸せ」とは何か、それを伝えていくことでもまた、被爆者に対する理解がひとつ進むのではないかと考えます。

3. 広報電子化部会

(1) 「継承活動に取り組む人々をつなぐ P J」参加者募集のご案内 (再掲)

埼玉県原爆死没者慰霊式 肥田舜太郎先生と



原爆被爆者の証言や被爆者運動の記録を収集・保存に取り組む「ノーモア・ヒバクシャ 記憶遺産を継承する会」では、当会が運営する「継承ポータル」

(<http://keishoportal.jp/>)、「継承ブログ」(<http://keishoblog.com/>)を、継承活動に取り組む方々をつなぎ、さらに多くの方へと発信していただける場にするため、「継承活動に取り組む人々をつなぐプロジェクト」を実施することにしました。

このプロジェクトは、全国各地にて継承活

動に取り組む方々を当会が取材し、上記の Web サイトにてインタビューやレポート記事の形式で掲載していくものです。

つきましては、このプロジェクトに賛同、ボランティアスタッフとしてご協力いただける方を募集します。主な内容は以下の通りとなります。

■ご協力内容：継承活動に取り組む団体・個人へのインタビュー取材
場 所：ご自身がお住まいの地域近隣

※必要経費として打ち合わせ、取材にかかる交通費をお支払いします。
※詳細は継承ブログおよび当会のウェブサイトをご覧ください。

戦後 71 年を迎え、被爆者の方々の高齢化がさらに進む中、継承する取り組みはさらにその歩みを急ぐことを求められています。全国にて取り組まれている活動がもっと多くの方に知られるだけでなく、活動同士がつながっていくことも、このプロジェクトを通じて実現したいことのひとつです。ご興味をお持ちいただけの方は、ぜひお気軽にお問合せください。

■ これまでの取材記事

*継承ブログ (<http://keishoblog.com/>)、通信に掲載されています。

(神奈川) 第 50 回 神奈川県原爆死没者慰霊式 2016 年追悼のつどいに参加して

(東京) 10/1(土) トークセッション第 12 回被爆証言に向き合うに参加して

(東京) 10/1(土) トークセッション第 12 回被爆証言に向き合うに参加して

(東京) 8/27(土) 被爆者との交流会 ～被爆者の証言と「継承」を考える～

(栃木) 8/20(日) 第 26 回 栃木県原爆死没者慰霊式に参加して

(埼玉) 7/31(日) 第 31 回 埼玉原爆被死没者慰霊式に参加して

(東京) 7/27 ピースポートおりづるプロジェクト「被爆体験お話の会」に参加し

(東京) 「被爆者の声を受け継ぐ映画祭 2016」に参加して

【お問い合わせ】

N P O 法人 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会

T E L / F A X 03-5216-7757

Email hironaga8689@gmail.com

Ⅲ. 各地の取り組み、関連企画から

1. 「継承活動に取り組む人々をつなぐ P J」

(1) (東京) <ヒロシマ・2016 連続講座> 「被爆証言に向き合う」に参加して

こんにちは、つなぐ P J のしのです！今回は元高校講師の竹内さん主催によるトークセッションの第 12 回に参加しました。

【連続講座のご紹介】 <http://keishoblog.com/?p=1343>

■ トークセッション初参加

駒込駅の改札を抜けて 5 分ほどの場所、掲示板には数ある広告の一つに「トークセッシ

ョン」の旨が書かれたA4の紙を見つけ見上げたビルが会場でした。

開場の3階まで上がると丁度ドアが開き中から年配の男性が出てきて「どうぞ」と身を捻った横をすり抜けて会場に入ります。

受付を済ませて前の方に座ると

「埼玉の慰霊式に来てた人？」

と資料を整理していた男性が話しかけてくれました。

そうです、と話しているうちにこの方が主催者の竹内さんであることがわかりました。

高校教師を定年まで勤め上げ、時間ができたから次はこうした活動をしているのだととてもアグレッシブな方です。

その方の一声でトークセッションが始まり彼が今回の目的や2名の被爆者さんの紹介をした後、それぞれの被爆者さんのお話が始まりました。

■田栗静行（しずゆき）さん（当時5歳）

「あの時、一緒に死んでしまえばよかった…」

首にスカーフを巻き、白シャツに身を包んだ清潔感のあるお洒落な田栗さんの話は3年6ヶ月前に宣告された胃がんの話から始まりました。

腹式呼吸らしいよく通る声で滑舌がよく、歌をやっている方かもしくは講師などをされていた方なのかといった第一印象です。

当時の様子を説明する田栗さん（左）



田栗さんは長崎で5歳の時に被爆しました。

実家は爆心地から500mもない橋口町、本当なら直爆で死んでもおかしくない場所に両親と妹の4人で住んでいました。当日はたまたま3歳の妹が腹痛を訴えたことで母親が妹の付き添いで病院に行き、田栗さんは家から5kmほど離れた小菅町の母方の祖父母の元へ預けられていました。

*被爆の時

8月9日11:02、田栗さんは正確な時間を見てはいません。突然ピカーっとものすごい光線が走った後、ドーンと聞いたこともないような爆音と地響きが彼を襲いました。田栗さんは爆風で壁に打ち付けられていました。

焼夷弾がおっちゃけた！

当時空襲で主に使用されていた焼夷弾が家に落ちたと思った大人たちとともに家の近くにある防空壕へ逃げ込みじっとしていました。

夕方になって恐る恐る出て峠から市街を眺めるとそこは火の海。

「これでひとりぼっちになったな…」

田栗さんは幼心に言いようのない孤独と不安を感じました。

明けて10日、母親は妹を背負ってボロボロになって祖父母の家まで帰ってきました。「お母ちゃん！」その時の驚きと張りさけるような喜びは田栗さんの表情を見てきっと当時も同じ顔をしていたのだろうと思いました。

*71年探している父

母親の帰ってきたその日から妹を祖父母に預けて母親と2人で父親を探し始めました。母親は5歳だった田栗さんは危ないので一人で行くと言ったものの、一度母親を失ったと思った田栗さんは母親が離れることへの喪失感を思い出しては泣き叫び結局母と一緒に連れて行くことにしました。

ニオイ！！

これは本当に残ると田栗さんは顔をしかめて言います。

真夏のあの日、人間の死臭や腐臭、汗、油…色んなニオイが混ざり合って鼻をつきとにかく何処に行っても地獄のように、そして言い表せないほどに臭かった。下着についたニオイは洗っても落ちません。

骸骨の黒くくぼんだ両穴はみんな悲しく自分を見ているような気がします。

母親は家があったらしい場所に着くと泣きながら割れた食器のかけらなどを集めていました。

後々母親は近所の豆腐屋に並んでいた主婦たちが一列に骨になって並んでいたことを当時を振り返りながら死ぬまで口にしていたと言います。

人間とは不思議なもので、数日もその状況を見ていると慣れてくるのだと付け加えました。

ニオイにしても、死体にしても。首のない赤ん坊を抱いている母親が横を通っても何とも思わなくなりました。

1ヶ月くらいは父親を探しました。

その当時は情報がないので「どことこの救護所に誰々がいる」というウワサを頼りに訪ね歩くのです。しかし一向に父は見つかりません。

たまたま叔母を救護所で見つけることができました。

額はかぼちゃの種のような形に裂けて骨が見えていて、左手の傷がありました。しかし意識ははっきりしていて、田栗さんが来たことに「よう来たね」と喜びました。左手の傷には蛆が湧いていて、夜になると肉を喰らうのが非常に痛いのだと言います。

「静坊、取ってくれんね」

叔母に頼まれたもののピンセットは看護師さんが持っていて余りがないのでマッチ棒に紙や綿を巻きつけてポロポロと落としてゆきました。

「気持ちよか〜」

そう言っていた叔母が一週間後に亡くなっていたのは後になって知ったことでした。

* 状況を理解する難しさ

2 発目の原子爆弾は小倉に落とされる予定でしたが天候の関係で長崎に変更されました。

「小倉におっちゃければ（落ちれば）良かったのに…」

長崎の人は口々に言うし、田栗さんも長い間思っていたと言います。

「でもそれはおかしいと気づきました。」

小倉の人の不幸を願っていたのではなく、理不尽にあまりにも多くの大切なものを奪われた自分たちの状況をどう理解して飲み込めば良いのかわからなかったのです。

私はこの話を聞いた時に“71年”という時間の長さを強く感じたように思います。

* 一番腹が立つこと

それは昭和天皇への怒りでした。なぜ3月の空襲で破壊された東京の街をその足で歩きながらすぐに終戦にしなかったのかということです。

* 妹の死

「男の戦争が終わった時に、女と子供の戦争が始まる。」

母方の祖父母の家に一旦は避難したものの、同じく避難してきていた長兄夫婦と子供たちとの争いは絶えず母は実家を出る決心をしました。妹はもともと体調が悪い上に逃げ回ってきたことでずいぶん衰弱していて、とうとう亡くなりました。

男たちで妹を畑へ運び茶毘に付しましたが、田栗さんは子供でも男だからとそこに立ち会いました。全て焼けるのに4~5時間はかかりましたが、その時の匂いは思い出せません。

* 海に返した遺骨

田栗さんが家庭を持ち、子供たちも大きくなってきたころ東京へ移ることになりました。もともと墓を大切にしている土地柄なので墓を守れないとなれば近所の方から大顰蹙です。東京のお寺さんに相談すると33回忌を迎えた魂は骨を土に還しても良いということだったので、それならあんな暑い中で水が欲しかったらうし、海はどこでも繋がっているのでも海にしようと思えば故郷の海にお骨を流すことにしました。こっそり家の墓から自分の父親（と思いたくて拾ってきた）、母親、妹の骨壺を持ち出しリュックサックに詰めると気の置けない友達が船を出してくれ、軍艦島で知られている端島の隣の高島付近から海流に流しました。

しっかり焼けた父と母の白い骨はすぐに沈みましたが、自分たちで茶毘に付した妹の茶色をした骨はしばらく海を彷徨ってゆっくりと沈んでゆきました。

* 被爆と病

「実際被爆の影響わかりませんが」と前置きを入れて話は進んでゆきます。

小学校に翌年入学した田栗さん。その頃は身体じゅうに嚢胞ができ、大きなもので10cm

くらいになりました。それを潰して膿を出します。それから鼻血もよく出たし、目もらい（ものもらい）が出るといった症状がずっと続きました。

母親は甲状腺の病気にかかりました。

「最近目が見えんばい」母親の顔は徐々に下がってきました。

*胃がんと被爆者手帳への思い

3年と6か月前、ついに田栗さんは胃の不調から病院で検査を受け胃がんを宣告されました。

「来るべき時が来たな」

それが最初に思ったことだったと言います。

治療を勧める医者に対し、5歳の時死んでもおかしくなかった命なので治療はしないと宣言するとずいぶんと驚かれたとお茶目な笑顔で笑います。

放射能もこれ以上受けたくないというMRIやレントゲンも拒みました。

そんな時「原爆症の認定を受けたらどうか」という話がきました。

「いやだ」田栗さんは即座に断ったと言います。

牛に押すような烙印があるでしょう、まるで被爆者だという烙印を押されたような気持ちになります。そして自分が被爆者だと名乗ることで息子は被爆者の息子になってしまう。親友は娘の結婚を自分が被爆者だからという理由で相手の親から破談にされたことを酒を飲みながら泣いていました。そしてそれは他人事ではないのです。

息子には結婚する時には父親が被爆者であることを必ず伝えるように言いました。それほど理解されない差別があったのです。

「妹は死んでよかった、女だから特に。僕もあの時死んでればよかったと思う。」

同郷の友人はお金のためではなく、国へ報告する気持ちで申請をすることを勧めました。田栗さんはその友人にいくらか心を救われ原爆症の申請をすることを決意しました。

お金は月13万ほど入ってきていますが寄付をしています。

友人の中には認められて良かったねと祝いの言葉をくれた人もいます。

お金？何が良かったのか…！おかしい。

お金をもらっていることは悲しいことです。本当はお金なんてもらわなくても穏やかな生活がしたかった。

そう語る田栗さんの目には悔しさを宿した色と涙が浮かんでいました。

「もう二度とこんなこと繰り返してほしくない。それだけです。」

田栗さんは会場に語りかけるように語調を強め、そして静かに席に着きました。

■渡辺晴（ひとみ）さん（当時14歳）

「生き取りましようか？死んどりましようか？」

私の名前はヒトミって言うんですが、電話口なんかで説明するときには晴天の晴の左側が

目ですって言っても知ってる人の方が少ないんです。なので普段は渡辺セイと名乗ってま
す。

おっとりとした独特のリズムで会場を笑顔にして、渡辺さんのお話はゆったりと手元の写真
付きの資料を見ながら始められました。資料には長崎の被害を受けた範囲の地図や渡辺さ
んが今年の8月9日に長崎に足を運んで撮った写真の数々。実は今年の8月9日は私も長
崎の爆心地に近い瓊浦中学校の慰霊式に出席していたのでもしかしたらすれ違ってい
たりして…と思ったりもしました。

写真は多くの犠牲者を出した長崎医科大学を中心に撮られたものが多く、その他渡辺さ
んが体験した「原爆ぶらぶら病」、アメリカが原爆投下の予行演習に使ったパンプキン爆
弾、そして原爆投下の日を再構成した論文などが資料としてありました。

*被爆当日

昭和20年8月9日、旧制長崎中学2年生だった渡辺さんは長崎の爆心地から3.7kmほ
どの県滑石町の家からほど近い平宗川で泳いでいました。

突然背後から強烈な爆音が鳴り響き川から上がると肩や背中を火傷していました。今で
いうトリアージをしていたんですね。助かる見込みのない重症患者は見捨て、程度の軽い
患者の治療は後回しにするのです。私は長く病院で待たされた挙句「火傷2度」と言われ
治療も何もされずに終わりました。

当時地面はバラスと呼ばれる石ころで、飛ばされて傷を負った人々はボロをまといぞろ
ぞろと逃げてきました。印象的だったのは女性は下が裸で、男性は服が裂けて飛んでも腰
バンドがよく残っていたことです。

負傷者の服を再現する渡辺さん（右）



逃げてくる人たちは背中を火傷したり手のひらを火
傷したりして患部はまるでマグロの赤身のような
座らそうと思っても支えにするために手の甲を付けな
いし、寝させようと思っても背中が痛くて横になれな
い。そういった人は一度腰を下ろすと死んで行しまし
た。

*家に避難してくる人々

渡辺さんには兄がいましたが、彼は9日の夜になっても帰ってきませんでした。

夜中の3時ごろ兄ちゃんが来たと言われ玄関に出てみると、そこには火傷で顔が腫れ上
がった学生がいました。10cmまで顔を近づけてその学生の顔を覗き込んでみてもそれが兄
かどうかすらわかりませんでした。結局その人は兄の友人だったようです。

母が「夕食は食べましたか？」と聞くと「まだです」というので母は台所からトマトを持ってきました。手でちぎって口に入れるとずるっずるっと火傷で剥けて垂れ下がっている唇の皮まで一緒に口に入るのです。母がハサミを持ち出しその方の垂れ下がっている唇の皮を切り取ると幾分か食べやすくなったと言います。その人は実家の福岡に帰るともかなわず4日後に亡くなりました。

その人もそうでしたが、負傷した人が泣いたということはあまり聞きませんでした。ただ人が流れる方へ目的もなく呆然とついていく人の列がありました。

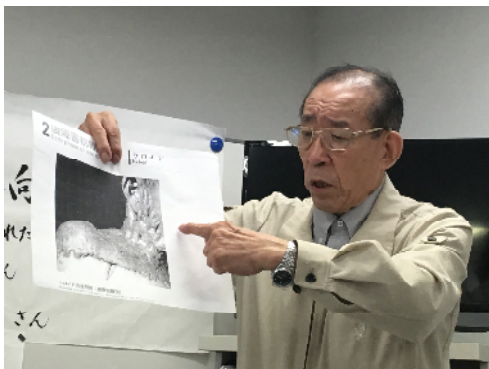
*被爆と後遺症

原爆の被害は当日だけにとどまらず長崎の人々を苦しめました。無気力で身体の抵抗力も低まり日常生活が手につかなくなる「ぶらぶら病」には渡辺さんも苦しめられました。当時放射能の脅威を知らない人々は被爆者を遠ざけようとした人々も少なくありません。そうした風評被害がまた被爆者を何重にも苦しめました。

いつ白血病が来るかわからないから30歳過ぎて結婚を考えようと思った人もいます。

後遺症である脱毛やケロイドにも多くの方が体験しています。

ケロイドの写真



若い娘さんが三角巾をして歩いたり、真夏なのに長袖を着ていたりする姿を当時はよく見ました。それは髪の毛が抜け落ちていたり、ケロイドを隠すためです。そういった人々を「原爆娘」と呼んでいました。渡辺さんも不定期にジーンと背中の一箇所に鈍痛が走る状態が今でも続いています。

田栗さんは口を引き結んで渡辺さんの話を聞いていました。

*終戦の年

原爆を落とさなくても戦争は終わったという人はいますが、原爆を落とされても戦争を止めない。と腹を切った将校さんもいるし、原爆が落ちないと戦争は終わらなかったと思うと渡辺さんは言います。当時の風潮としては死んで国に奉公するのが当たりまえで、日本にはいざとなったら神風が吹くと信じられていたのです。天皇の名前を口に出す時は「恐れ多くも…」という前置きがあり、そして全員が直立不動になって「天皇陛下」という言葉を聞くという徹底ぶりでした。「上官の言葉は天皇の言葉である」と上官に逆らうことは許されていませんでした。学校の先輩、後輩の間柄でさえすれ違う時は敬礼を義務付けられていました。当時は先生よりよっぽど先輩の方が怖かった。今思うとおかしいですが。と渡辺さんは付け加え軽く笑いました。

終戦の知らせを聞いた時はホッとしました。夜も寝られるし食も少しはある。軍人にも

いじめられない。軍人が国民をいじめていたんです。学校の職員会議で配属軍人は校長の横に座っていて、それに不服がある場合は会議をさせてもらえないという有様でした。

* 兄の死んだ防空壕の話

最後に、と渡辺さんは話し始めます。

8月9日兄が亡くなりました。

兄は12人くらいずつ決められた時間に防空壕に入ったり、出て作業をしている最中でした。11時が交代の時間だったので、兄が防空壕を出てすぐに原爆は炸裂しましたようです。

10日、兄のいた学校がわかり父が探しに行きました。

防空壕の外にほとんど裸のような状態で固まっている10数名の生徒は重度の傷や火傷でもがき苦しんでいます。

「渡辺ヒサシはどこにおりましょうか！」

と尋ねると、苦しんでいる学生の一人が指をさしてその辺にいます。と応じました。

「生きとりましょうか、死んどりましょうか」

渡辺さんは涙ぐんで「その時父はどんな気持ちでその言葉を発したのでしょうか…」と自分自身に問いかけるようにつぶやき言葉を探します。

父親はとうとう裸で死に絶えている兄の姿を見つけ出しました。友人が最後の饞に鉄兜で水を腹一杯飲ませたと聞きました。その死に顔は苦しんだ様子が見受けられないような綺麗な顔だったと言います。

* 終わりに

いかがだったでしょうか？

田栗さんは「これからもう弱っていく一方です、大分痩せました。次は若い人に繋いでいただきたい」と括りました。その言葉の通り、戦後71年経った今、顔を見て当時原爆を体験した方のお話を聞ける機会は随分少なくなりました。



とくに平成生まれで昭和を知らない私のような若い人には興味がなくても、受け継ぐ気がなくてもきっと自分のルーツに繋がっている部分に気づく部分があるので一度でも体験を聞いて見ることをオススメします。

しの（継承活動に取り組む人々をつなぐPJ）

(2) (神奈川) 第 50 回 神奈川県原爆死没者慰霊式 2016 年追悼のつどいに参加して

みなさんこんにちは、つなぐPJのしのです！

6月の埼玉 8月の栃木、長崎に続きこの度は神奈川県原爆死没者慰霊式に参加してきました。

日時：2016年10月2日（日）10時～12時

会場：鎌倉市 大船観音寺境内 原爆慰霊碑前

主催：神奈川県原爆被災者の会

慰霊祭 10時～10時30分

開式

司会 木本 征男さん

黙祷

合祀者名簿奉読……西 純子さん

導師入場……大船観音寺住職

読経

献水……網崎 万喜男さん、村山 恵子さん

献花……遺族代表 廣石 嘉乃さん 来賓 遺族・一般

導師退場

閉式

追悼のつどい 10時～10時30分

開会

司会 丸山 進さん

主催者挨拶ならびに追悼のことば 神奈川県原爆被災者の会 中村 雄子会長

来賓追悼のことば

来賓紹介

メッセージ披露

遺族代表挨拶 居森 公照さん

折鶴献納

歌と演奏 吉川 敏男さん

「かぞえうた」「BELIEVE」「人間の未来を信じているから」

全員で合唱 「原爆許すまじ」

閉会

*慰霊式への参加

神奈川県 JR 大船駅を降りると小高い雑木林からにゅっと頭を突き出した白い巨大な観音様が見えます。



彼女をめぐけてまっすぐ川を渡って足を進め、雑木林にぐるりと半周巻きつけたような傾斜のきつい坂を登ると駅からは見えなかった山門が口を開いて出迎えてくれました。山門の右の柱には白地に黒い文字で記された「2016年度「追悼のつどい」」。

開会の1時間ほど前に到着したにも関わらず会場にはすでに受付けの方以外の参列者の方もちらほら見え、3mほどの慰霊碑の前に並べられた席に座っている方は隣同士でおしゃべりをしているような穏やかな雰囲気での会場でした。

神奈川県原爆死没者慰霊碑と祭壇



神奈川県原爆被災者の会事務局長の東さんも暖かく出迎えてくださり挨拶を交わして会場を改めて見渡しました。

小高い丘の上のお寺だということにざっと見ただけでテントは3張、椅子は160席分ほどあり平均年齢が80歳を超えた被爆者の方々やその関係者がこんなに来れるのだろうかというのが最初の印象でした。

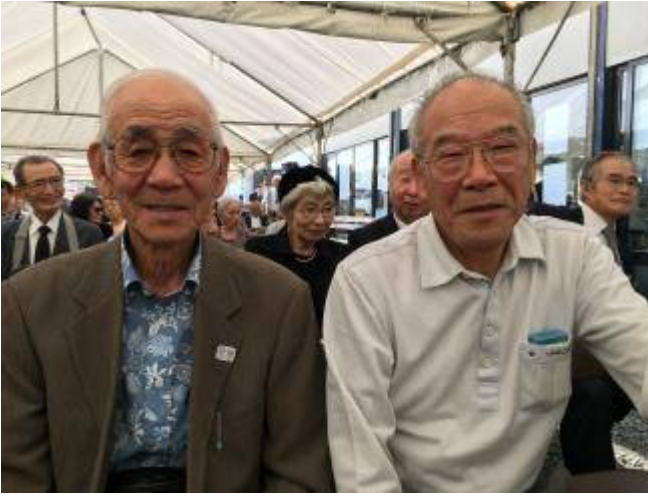
しかし開会が迫った10時前には席はほとんど黒い服で埋まり、聞くところではその参加者は143名に上ったようです。被爆

から71年経った今でも150名近く参加者を募れる神奈川県の取り組みの力強さに驚かされました。

*二人の被爆者

さて、開会を待つ間お話を聞かせてくださった2名の長崎の被爆者さんがいます。2方は私の席の後ろに座っていたので私が身を半分ひねって顔を合わせると最初は不思議そうにしていたが、私の祖父母が被爆者であることを伝えると「ああ」と納得したようにご自身の経験を語って下さいました。

右 富永 国人さん (当時 3 才)
左 實本 勝恵さん (当時 10 才)



長崎の爆心地から 2km の所で被爆した實本さんは当時を振り返り言います。

「戦争は嫌だ。」

その短い言葉に凝縮された想いは計り知れません。

2 人は口を揃えて「若い人たちに伝えたいことは 2 度とこういうのを繰り返したくないということ。あんな残酷な死に方をして…2 度としてはいけない。」と繰り返しおっしゃっていました。

* 400 分の 1 の命

「あなた広島出身？」

私の左となりには空席が 2 つあり、その向こうに座っていた背の高い男性がおもむろにこちらを向きました。歳の頃は私の祖父くらいでしょうか。

大学まで広島にいて東京に出てきたことを伝えると居森ですと名乗った男性は言います。

「本川小学校って知ってる？」

知ってますよ、広島にいた頃はたまに小学校の前を通っていたことを伝えると男性は間髪入れずに口を開きました。

「私の妻の清子は本川小学校で唯一生き残ったの」

「え！」

何年か前に読んだまま記憶に埋もれていたとある新聞の記事が脳裏に浮き上がります。それは広島の爆心地から 400m ほどのところにあった本川小学校での悲劇と奇跡について書いたもの。8 月 6 日のその日、約 400 名ほどいた生徒はたった 1 人の生徒を残して全員が亡くなったという話でした。

「前に新聞で読んだことありますよ！下駄箱のところで被爆して生き残った方ですよ。新聞にはお互いが助け合ってここまで来たって病院で手をつないだ写真が載ってましたよね。」

記憶を頼りに繰り返す私の言葉にうんうんと少し照れたように頷く居森さん。数年前のことではっきりした顔も名前も覚えてはいませんでしたが、それでも一度見たことのある方だと思うとなんだか急に親しみが深くなるように感じました。

残念なことに半年前に奇跡の生還を果たした居森清子さんは他界されたということでした。そうした経緯もあってか遺族代表挨拶では居森さんの名前が呼ばれ、彼がマイクの

前に立ち訥々と妻が願った平和への思い、伝えていくことの大切さを言葉にします。

遺族代表挨拶をする居森公照さん



妻の清子さんの思い出の話ではまなじりに涙を溜めて言葉を震わせる場面もあり、それでも歯を食いしばって言葉を紡ぐ彼の姿は被爆者であり妻である清子さんに夫として最後まで真剣に向き合ってきた歳月を偲ばせていました。

閉会後には一人一つお弁当をいただきました。

そのお弁当を持って居森さんに妻・清子さんのことをもっと聞かせて欲しいとお願いすると快く承諾していただいたのでお寺から町内を一望できるあばら屋の長椅子に並んで腰を下ろしました。

カバンから取り出された何枚かの写真は歳月を順を追って重ねた夫婦の軌跡でした。

居森公照さんと生前の清子さん



どの写真も仲睦まじく肩を寄せ合ったり腕を組んだり、その中には清子さんが小学生へ向けて証言活動をしている写真もありました。

「清子の語り部をしたって方がわざわざ横浜に来たり、今も本川小学校では毎年6年生を中心に「清子劇」って劇をやってるんですよ」

「清子の話が今年絵本になるんです。」

「清子の体験を英訳してカナダや国連に送ったこともあるんですよ。」

清子、清子と妻の話をする居森さんはとても嬉しそうで、一緒に生きてきた彼女の顔も浮かぶようでした。彼女の奇跡的な体験もそうですが、ここまで多くの人に彼女の話が伝わっているのはひとえに夫の公照さんの支えもあったからだろうと思いました。

また彼自身も子供時代に戦争を体験し、機銃掃射をされたこと、いつもお腹が減ってい

たこと、横浜で清子さんと出会ったこと…貴重なお話を聞かせていただきました。

*原爆二世の会



「あら～被爆も三世の時代になるのね～！」

「そりゃそうよ」

ひとときわ明るい声で受付をしてくださった神奈川県原爆被災者の会 2 世支部の門川さんをはじめ 2 世の皆さんも暖かく迎えてくださいました。

神奈川の 2 世の方々はとても積極的で、式の終わった後も皆さんで集まってこれからのことを話し合っていました。

東京とも協力してできることがあればと前向き

なお話がありました。

帰路に着いて駅からもう一度巨大な観音様を見上げました。来年もここで慰霊式は開催されるのでしょうか。

参加したことのない方が参加する機会がさらに増えることを願います。

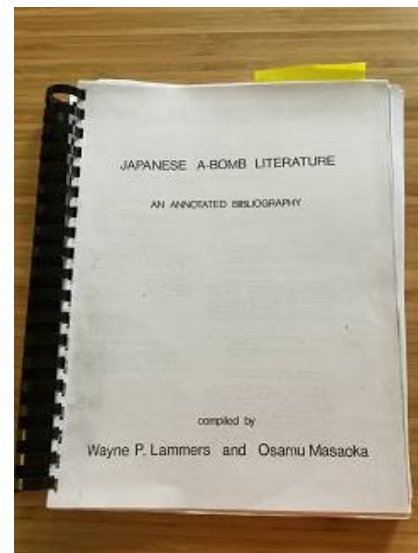
しの（継承活動に取り組む人々をつなぐ P J）

VI. 米国オハイオ州ウィルミントン大学の平和資料センターを訪ねて

継承する会理事 山根和代

10 月にはアメリカの大学を訪問する機会がありました。ニューヨーク大学の図書館では、1980 年代の反核平和団体のポスターが保管されており、数枚見せていただきました。日本のポスターですが、そのまま図書館に置いておくだけでなく、展示物として大学で活用すると良いのではないかと思います。

またペンシルベニア州スワースモア大学の Peace Collection というアーカイブを訪問しました。国際的に有名ですが、被爆者に関する資料、平和運動、良心的兵役拒否者などに関してたくさんの資料がありました。私が編集に関わっている英文通信 Muse（平和のための博物館市民ネットワーク通信）も保管されていました。ノーモアヒバクシャ記憶遺産を継承する会の通信も送ると、きちんと保管をして、海外の研究者に読んでもらえるのではないかと思います。（想像以上に日本語が読める海外の研究者がいるようです。）



オハイオ州の3つの大学で講義をしましたが、多くのアメリカ人は原爆投下で第二次世界大戦が終わって良かったと思っているようです。しかしノーモアヒバクシャ記憶遺産を継承する会のビデオ（英語の字幕付き）のような教材があると、考えが変わっていくようですので、このような発信をもっとしていく必要性を感じました。

オハイオ州では、ウィルミントン大学にある平和資料センターに行く機会がありました。このセンターはバーバラ・レイノルズさんが創設しましたが、被爆者に寄り添った彼女の記念碑が広島の平和公園にあります。1950年代にアメリカの核実験に抗議して一家でヨットに乗って抗議活動を行ったことが、展示されています。この平和資料センターにも被爆者に関する貴重な資料が日本語と英文でたくさんあり、そのインデックスをいただきました。今後内容を変更する可能性があるそうですが、今後そのセンターとウェブサイト上でリンクすると良いのではないかと考えています。

現在集めているヒバクシャ国際署名には、多くのアメリカ人が喜んで署名して下さいました。伝えていけば必ずわかってもらえると思いますので、積極的に海外に継承する会としてもっと発信をしていくことが重要ではないかと考えさせられました。

VII. 出版物のご紹介

■ 黒岩晴子編『平和な未来を願うメッセージ～No War Know War』

編者の黒岩さんは、佛教大学社会福祉学部で学生とともに原爆・戦争体験者をはじめ、沖縄の基地問題、福島原発事故など、さまざまな被害を受けた当事者の証言を聞く機会をつくり、被爆60年から毎年「原爆展」を開催してきました。その証言や講演、原爆展の記録を集大成したこの本には、また、母親になった卒業生らの手記や座談、被爆者の証言をもとに制作された絵本なども収録されており、大学で学んだ実践が今この社会を生きる若い人たちにしっかりと根づいているのを感じとれるのもうれしいことです。（定価：2,

000円＋税、日本機関紙出版センター)

■ 原爆被害者相談員の会・被爆者の自分史編集委員会編集・発行『生きる―被爆者の自分史―第五集』

広島では、「被爆者とともに」多様な活動をしてきた原爆被害者相談員の会が、被爆者に「自分史」を書くよう呼びかけ、そのメンバーがサポーターとなりながら、これまでに『生きる―被爆者の自分史』1～4集を発行してきました。7回のつどいを重ね約1年半をかけてまとめられた今回の第5集にも10人の自分史を収録。1926年（大正15年）生まれから、被爆時生後2カ月の人まで、さまざまな年代層の被爆者の原爆体験と戦後70年の軌跡がつづられています。サポーターのみなさんもまた、新しいメンバーを加えながら体験を継承しつづけておられることに、広島ならではの層の厚さを感じます。（非売品、カンパをお願いしています。申し込みは、〒730-0051 広島市中区大手町5-16-18 大手町パルビル4階 原爆被害者相談員の会へ。専用携帯：090-7375-1211）